

■九州朝日放送番組審議会議事概要（7月分）

第595回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成29年7月18日（火） 午後3時30分～5時25分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	委員総数 8名 出席委員数 6名 （出席委員） 古宮 洋二副委員長、池田 勝委員、 井手 雅春委員、鶴 利絵委員、 三好 京子委員、野田 幸之輔委員 （放送事業者側出席者名） 代表取締役社長 和氣 靖 常務取締役 二木 清彦 取締役編成制作局長 清水 透 報道局長 臼井 賢一郎 ラジオ局長 園田 哲也 ラジオ局編成業務部 部長 木附 ゆかり ラジオ局編成業務部 担当部長 佐藤 雅昭 ディレクター（KBCメディア） 東 友紀 視聴者・広報室長兼番組事務局長 奥園 徹 事務局 原 由美子（ラジオ編成業務部）、松永 俊郎（視聴者・広報室）
議題	・ラジオ番組「川上政行 朝からしゃべりずき！」 <放送日>平成29年5月22日（月）午前6時30分～9時30分 ・「九州豪雨」の報道全般について 1. 訂正放送について 2. 平成29年7・8月度 ラジオ・テレビ番組編成状況 3. 平成29年6月 視聴者・聴取者応答状況の報告 4. 次回平成29年9月度（第596回）審議会日程 9月19日（火）午後4時00分～開催 <課題> ディスカッション 「テレビは何故つまらなくなったのか ～メディアとしての存在価値を問い直す～」について 5. その他
議事の概要	◎委員の意見（概要） 初めに「川上政行 朝からしゃべりずき！」について委員からは ○番組の冒頭で本日のコンテンツとその内容が紹介される時間帯の案内があった。 3時間のラジオ番組はコンテンツが盛りだくさんで、リスナー自身が興味のある コンテンツを聞き逃さないためにも最初にタイムテーブルを紹介するやり方は非 常に良いと思った。 ○新聞各紙からのニュースをきちんと紹介しながらも、ニュース報道にありがちな 堅苦しさのない、通勤前の慌ただしさの中で穏やかに一日をスタートするにふ さわしい番組だ。 ○「朝駆けニュースタービー！」ではスポーツの結果を単純にお知らせするのでは なく、ツイッターなどによりリスナーの参加させる仕掛けがしてあって非常に面 白い作りになっていた。番組の随所にそうした仕掛けがあって、放送局が一 方に制作して放送しているのではなく、リスナーと一緒に番組を制作している情報 番組だと思った。 などの評価を頂きました。 また、気になる点や望むこととしては、 ○ラジオメディアの苦境が伝えられて久しいが、こうしたリスナーを巻き込み一 緒に作り上げていくような手法をうまく生かせば、まだまだラジオメディアに大 きな可能性があるのではないかと気づかされた。 ○「しゃべりずき◎インサイド」のコーナーで、コメンテーターによるアメリカの 三権分立の解説は加計学園の問題と相まって非常に面白かったが、川上さんは無 難なコメントにとどまっていたのが気になった。報道が萎縮することのないよう 頑張ってもらいたい。 ○「こっそり三面教師」というコーナーの名前の意味が分からなかった。テーマや 目的などがあれば教えてほしい。 などの批評や提言を頂きました。 これらに対して、担当者から、 ○KBCラジオでは2016年4月に平日の午前帯を大幅改編し、この番組はその 目玉だった。通常の朝帯は報道色が強い番組が主流だが、川上氏は身近にいるお 父さんのような方であり、色々なものを楽しくわかりやすく伝えていながら、 リスナーの皆さんにも参加していただけるような番組作りを心掛けてきた。 ○川上氏はMCを務めるベテラン女性アナウンサーの「母親」として「女性」とし ての意見などもうまく引き出している。リスナーの皆さんにもファミリーとい うような印象で様々なご意見を頂いていると思う。 ○「朝駆けニュースタービー！」の実況（結果発表）はスタッフが直前に出た結果 をスタジオの川上氏に手渡すだけで、あとは川上氏の完全アドリブで喋ってい る。 などの説明をしました。 続いて、「九州豪雨」でのKBCの放送対応を説明し、「九州豪雨の報道全般」につ いて感想や意見を委員に伺いました。 委員からは ○23時以降の「ドオーモ」の時間も現地から中継をされていて、とても好印象だ った。夜をとおしての報道には大きな敬意を表したい。自社制作番組が多く、報 道に力を入れてある局ならではと感心した。 ○災害報道に関する報道の綿密さ、緻密さに関し、KBCの評価は非常に高く、現 地の災害対策本部に対するヒアリングではKBCの報道をよく見ていたという風 に聞いている。 ○過去の災害報道などの総括がなされたためか、従前に比べ、現地からの情報が今 までの様々な災害に比べてスピーディーでかつ分かりやすくなったように感じ る。 ○今回の豪雨では大規模な停電に加え、インターネットも通じなくなった地域があ った。携帯の電波も途絶え、ネットの情報も得られないような場合には、やはり ラジオからの情報が大切になると思う。 ○これからは、総括の番組に取り組まれると思うが、地図や地形図・模型を使っ ていただき、危険予知や防災意識の啓発に努めていただきたい。 などの意見、感想を頂きました。 これらの意見に対して会社側出席者からは ○災害報道は報道機関の総合力が問われる。質と量のとりわけ質の方についてはま だまだ追求すべき点があると考えている。 ○多岐に及ぶ検証報道についてはこれから本当に力を入れたいと考えている。新た な事態という異常気象の元での検証の本質にどのようにして行きつくのか、これ から追求していきたいと思う。 ○中継システムにかなり簡便なものが導入され、スピーディーな中継が可能となっ ている。現場のリアルタイムを伝えることにおいては効果的である一方、危険度 は高くなる。取材の在り様、安全確保は厳しく管理していきたい。 などの説明をしました。